

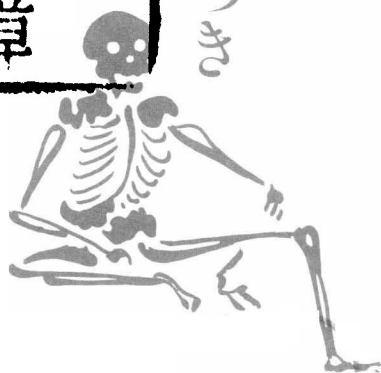
養老 孟司

運のつき



養老孟司 運のつき

苏工业学院图书馆
藏书章



アガリハタシ

運うんのつきき

二〇〇四年三月一八日 第一刷発行
二〇〇四年四月一九日 第三刷発行

著者 養老孟司ようろうたけし

発行者 石崎 孟

発行所 株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座三・二三・一〇 一〇四一八〇〇三
販売部〇三(三五四五)七一三〇
電話番号

編集部〇三(三五四五)七〇三〇

印刷所 三松堂印刷

製本所 積信堂

装幀・装画 南伸坊

©2004 Takeshi Yoro, Printed in Japan

ISBN4-8387-1460-2 C0095

乱丁・落丁本は小社販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

*マガジンハウスホームページ【<http://www.magazine.co.jp/>】

運のつき——目次

第一章 いずれ死ぬ

7

本当に死んでしまったら、怖いもクソもない／私にとっては「死」ではなく「死体」こそが現実／だれだって死体になる／大賢は大愚に似たり。そっくりだけど大違い／すべての患者はかならず死ぬ／寿命は運。私は専門家におまかせします／東郷平八郎は運の良さを見込まれた／自分の死なんてどうでもいい

第二章 身を鴻毛の軽きに置いて

27

死んでもいい、は「危険思想」／カタリ派と特攻隊は「危険思想」の両面／共同体を消すことが「進歩」だった／本質的に変わらない「私」なんて、ない／個性は心にはなく身体にある／億兆心を一にして／「世間」が西欧近代的自我の怪しさを教えてくれた

第三章 お勤めご苦労さん

45

「勤めている私」は、いまは前世のよう／「我慢する」のが当然だった／我、事において後悔せず／「世間」という大きな書物を読むために／研究室を出た／私の価値観が確立した瞬間／大学紛争が収まってから、また考えていた／テーマが勝手に増える／フリーターになりたかった／私のなかで紛争は終わっていない

第四章 平常心

67

日本は「読み書きソロバン」の国／東大紛争が私の人生を変えた／戦争が飯か。私はぎりぎり、飯をとった／利口な人はアメリカかヨーロッパへ行った／論理より「いろいろ」が好き。全体をつかみたい／共同体は、世の中は、変わる。変わらないものは、なんだ／中庸をとるために極端な理論を立てる

第五章 変わらないもの

85

「敗軍の將、兵を語らず」できた戦後／敗戦で私は「たまされた」と思った／解剖を選んだ理由／すべての結果が自分に戻ってくる／世間が激動すると科学者と技術者が輩出する／研究は「物量」ではなく特攻で／たった一人で続けた戦争／本当に自分で学問をするということ

第六章 学問とは方法である

103

科学はしょせん、脳の紡ぎだす物語／解剖学は『フォーカス』と同じ／私は解剖という方法論にしたがつているだけ／非日常より日常を、独創より平凡を、選ぶ／「脳という方法」を使う／フツートを重ねるとトクベツになる？／選ぶのは対象ではなく方法、と決めた／「あたりまえ」は意外にむずかしい

第七章 主義者たち

121

亡霊がよみがえる／私がものを考える、根本の動機／研究室を追い出され、本気で腹を立てた／私は純粹行為主義者／自己チューの社会的意味／純粹行為はトイレの小便と同じで、枠が必要／宗教は新しいほど危険／大学近代化のはじまりが紛争だった／本当に正しいのはなにか

第八章 日本人は諸行無常

141

同じ事件でも人によって経験は違う／同じ事件でも社会によって経験は違う／個人は社会から区別できない／日本とアメリカはよく似ている／「俺の本って、お経じゃないか」と思った／科学はキリスト教の解毒剤／現代世界は「同じ」という機能の上に成り立つ／そもそも日本語が「諸行無常」／ゼロから考え直す／原始仏教になった

第九章 努力・辛抱・根性

163

考えるためにはこだわる必要がある／ファールはハチに徹底的にこだわった／単純な解答はたいていウソ／古武道の稽古と「考えること」は同じ／脳の訓練の半分は、体を動かす訓練／「これを楽しむもの」に「かす」に至る三段階／「考えること」を妨害するもの／「考えないほうがいい」ことなんかない

第十章 若いころ

183

私の履歴は、本人的には十重二十重／「百人殺さなきゃ、立派な医者にはなれん」の圧迫／まったく違う自分になっていたかもしれない／日本というヘソの緒が切れない／「人間」じゃなくて「人」になろうと努力してきた／日本人は「生きて」いない／世間とは浮世の義理／それをいつちゃあ、お終めえよ？／「生きる」ことがわからないはずがない

第十一章 現代を生きる

203

「所を得ない」人生／人一倍世間を気にする「変わり者」／三つ子の魂百まで／虫は、母の外、世間の外だった／この国は「自分流より世間流」／世間と格闘するうち、自分も世間も変わってきた／日本人として生きること／日本も、私も、楽観主義でいきたい

運のつき

第一章

いづれ死ぬ

人は生まれて、歳をとって、どこかで病気になって、最後に死にます。まだ私は死んでませんけど、いずれ死ぬでしょう。でもそれは、みなさんも同じです。

私はいま六十六歳、もはや高齢者の仲間入りです。この歳になったら、新しいことなんかとうていはじめられませんね。いままでやってきたことを、自分なりに整理する。それだけで精一杯です。じゃあ自分は一生なにをしてきたのか、どう考えてきたのか、それをお話してみようかな。なんとなく、そう思ったわけです。だれの参考になるか、そんなことはわかりませんけど。

ただし、ひとつだけ、私の人生では「新しい」こと、つまりまだ済んでないことがあります。それは死ぬことです。じゃあ、まずそこから話をはじめようか。次にそう思いました。逆向きの人生論です。

本当に死んでしまったら、怖いもクソもない

いずれ死ぬと書きましたが、自分が死ぬことなんて大した問題じゃありません。そういうと、信じてない人が多い。「格好つけやがって」。そう思われてしまったりする。「自分が死ぬって、大問題じゃないか」。たいていの人はそう思っているでしょう。でも、考えたらす

ぐにわかるじゃないですか。「自分が死んで、なにが大変か、死んだら、それを心配する自分がいらないんだから、考えたってムダじゃないか」って。

「そりゃ理屈だろう」。そういわれてしまいそうです。べつに理屈じゃありません。素直にそう思っているんですよ、私は。

「そうはいうけど、死にたくない」。そういう気持ちは、だれにでもあると思います。私だってありますよ。とはいえ、だれでも死ぬことはたしかですから、いくら死にたくないと思っても、結局はムダです。

でもやっぱり、納得しないでしょね。私だって、納得はしてません。でも私たちは毎日眠るじゃないですか。そのまま死んでしまったら、どうなりますか。二度と目がさめない。それで死を「永遠の眠り」というんでしょうが。寝ている本人にとっては、生きてようが、死んでようが、関係ないじゃないですか。寝ている以上は、死んだことにも気づかないんですから。

飛行機が揺れると、怖くなります。墜ちたらどうしよう。そう心配するわけです。それはじつは「死ぬこと」が怖いわけじゃない。そこまでの途中が怖いわけです。たいていの人は、自分が乗っている飛行機が墜ちた経験がありませんからね。墜落して、本当に死んでしまったら、怖いもクソもない。

病気も同じです。ガンでほとんど死にそうという人が、死ぬ心配をすることは、まずありません。苦しくてしょうがないから、「先生、なんとかしてくれませんか」と医者にいつたりしています。「死のうが生きようが、そんなこと、どうでもいい。ともかく楽にしてくれ」。医者にそう頼んでいるわけです。ガンになったら、どうしよう。それを心配するのは、まだ元氣な人にきまっています。

健康でふつうに暮らしていると、飛行機が墜ちる、ガンで死にそうだ、そんな状況は、頭のなかで想像するしかないわけです。じゃあ、想像したらそういう状況がわかるかというなら、これがわからないんですよ。

いってみれば、恋愛と似たようなものです。なんであんなに一生懸命だったんだろ。そのときは無我夢中ですが、あとで考えると、それがわからない。自分が経験した恋愛だって、そのときの気持ちをはっきりとは覚えてないんだから、まして未経験の死なんて、わかるはずがないでしょ。死は人生の大事件です。恋愛以上の大事件かもしれない。それなら、死ぬときの自分の気持ちがわかるかといえば、わかるわけがありませんよね。「じゃあ、どう考えればいいんだ」。死ぬのは私じゃない、別の人。そう思えばいいわけです。

だって恋愛中の私は、いつもの私じゃないでしょ。死にそうな私だって、それと同じです。死ぬことを考えているのは、いまの元氣な私です。でも「現に死にそうな私」は、「いまの

元気な私」じゃない。そんなこと、あたりまえです。だからその二人は別人なんですよ。

それでも私は私、同じ私じゃないか。そう思った人は、『バカの壁』（新潮新書）でも読んでください。ともあれ別の人が死ぬんですから、死ぬことはその人にまかせておけばいいんですよ。というより、その人にまかせるしかないじゃないですか。

「そんな理屈で、死ぬという大問題は解決しないよ」。それはそのとおりかもしれません。でも理屈にするなら、自分が死ぬことについては、このあたりがせいぜい、というところでしょう。

理屈で解決しないから、人間は具体的に人生を生きるんですよ。理屈で人生が全部わかるんだったら、わざわざ生きてみる必要も、死んでみる必要もないじゃないですか。「死ぬとはいかなることか」、それが十分にわかっていているなら、死ぬのは面白くもおかしくもないでしょうが。ただのあたりまえです。考える余地もない。

私にとっては「死」ではなく「死体」こそが現実

こんなふうに考えるようになったのは、いつからかといったら、なんと還暦かんれきを過ぎてからです。死について、それまでは別なことを考えてました。

たとえば死という言葉はあまり使いませんでした。だって、解剖学を勉強して、死体を年中見てましたからね。私の場合には、死ではなくて死体なんです。死という言葉は、死体とは違って、具体的な「なにか」を指すわけじゃありません。「死」は抽象的なんですよ。「死」という名詞ではなくて、「死ぬ」といえば、もうすこし具体的になるような気がします。でも、よく考えてみると、これもやっぱり抽象的じゃないですか。「死ぬ」ことをきちんと定義しようとしてみればわかります。だって「死にかけている」なら、「まだ生きている」んですからね。酒瓶に酒が「もう半分しか残ってない」と、「まだ半分残っている」の違いでしょ。ともあれ瓶は空じゃない。

「死ぬ」って言葉は、動詞です。動詞は動きを示すわけですけど、死体は動きませんよ。死体になるまでは、死んでないわけです。それなら「死ぬ」って、どの時点の話ですか。脳死の議論のときに、「もはや死に向かって不可逆的に進行するしかない状態」なんていう定義がありましたけど、それなら脳死の定義じゃなくて、人生の定義ですよ。

死体なら、定義がはっきりします。目の前にあるものが死体かどうか、きちんと「科学的に」調べられますからね。ところが、ここから先が、ふつうには話を通じにくいわけですね。なぜかって、ふつうの人は、死体なんて年中見ているわけじゃありませんからね。まして死体を運んだり、触ったり、切ったりしませんよね。だから「死体の話なんて、極端な話だ」。

そう思っちゃうわけです。でも私は解剖を三十年以上やってきました。そうすると、どうなるか。いやでも死体が具体的になるんですよ。むずかしくいうと、現実になります。

私は東大医学部の解剖学教室に三十年いました。おかげで死体が現実になってしまったんです。つまり「あつて、あたりまえ」になったんです。ふつうの人は、もちろん死体なんかに関わらない。そうすると、死体が想像の上だけのものになるわけです。想像というのは、実際よりも極端になったり、足りなかったりします。現実が想像を上回ると、「想像を絶する」といいます。極端な災害なんか見てしまうと、そういいますよね。逆にそれなら、現実が想像より不足するときは、なんといえはいんどしようかね。そのほうがふつうだから、特別な表現がないんでしょね。

死体がそうです。死体というものは、実際よりも、想像のほうが豊かになるものです。たとえば必要以上に不気味になるんですよ。でも私にとっては、死体は想像じゃない、ただの平たい現実です。

だれだって死体になる

死体は一般的に思われているより、ふつうのものです。だれだって死ぬんですから。いま、

地球上の人口は六十億だといいます。それなら、六十億の死体がいずれは発生するわけですよ。でも、いまの人はそれを見ない、経験しない、考えたくない。それがふつうでしょ。

「だからお前が変なんだよ、ふつうじゃないよ」。……そうでもないでしょ。だれでもなるものが死体だとすれば、それは自分の一部じゃないですか。いまの世界は、自分の終の姿（すがた）を見ない人たちの集まりなんです。そのくせ、見ないほうがまともな人生だと信じている。済みませんけど、私はそう思ってます。

ほかの人からよくいわれるんですよ、お前は抽象的な議論をするって。でも本人はそう思っていない。死については、とくにそうです。ふつうの考えのほうで、この場合は抽象的なんですよ。具体的に考えたら、死とは、「俺はいつ死体になるんだ」ってことでしょうか。そんなこと、考えたってしょうがないでしょ。死体になったときは、死体について考える自分がもういないんですから。

よく「死体は不気味だ」なんていってますが、じつは死体は自分じゃないですか。だれだって死体になるんですからね。それなら自分が不気味だってことでしょうか。幸か不幸か、自分がその不気味なものになる前に、不気味だと思うほうの自分は死んでしまう。だから平気で死体は不気味だなんて思うんでしょうね。

だからどうなんだって、不気味だと思うのが、変なんです。堅い言葉でいえば、死を受